

# 山弥伝承について

—ある一つの淵源—

山口保明

(一)

山弥についての伝承は、相当に流布していたようである。柳田國男は「九州の方では是を日向の外録の金山を開いた、三弥大尺といふ人の出世譚」<sup>注①</sup>として採録している。また、八夢買い長者型<sup>注②</sup>の昔話として、関敬吾は愛媛県温泉郡神和の三弥話と鹿児島県下甕のそれを収録<sup>注③</sup>している。他の類書も多く記載しているところであり八かね掘り山弥<sup>注④</sup>が登場し、積財の後に処刑されるといふストーリーである。そうして、この悲劇性を含むが故に、山弥の話は各地に伝播した形跡が認められる。例えば、屋久島安房に伝えられる「仲士のはやし」<sup>注⑤</sup>などは、その一例であろうか。さらに西鶴の「国に移して風呂釜の大臣」<sup>注⑥</sup>のモデルが山弥であると指摘されて、近來諸注実在の山弥をあてる。勿論、西鶴一流の脚色が施されているが、八大福新長者教<sup>注⑦</sup>のモチーフとして用いるならば、恰好の題材となつたであらう。

そこで、八サンヤばなし<sup>注⑧</sup>は単なる伝承や伝説の枠内におさめられない原話を存するらしい。本稿では、その一つの淵源としての山

弥の実像を時間(時代)と空間(場所)の座標からみてみたい。

注① 『定本柳田國男集』(第六卷) 三二七頁。

注② 『日本昔話集成』(第二部本格昔話) 所収。

注③ 下野敏見『やくしまの民話』 九六頁。

注④ 『日本永代蔵』(卷三) 所収。

注⑤ たとえば、松本義一「府内の山弥長者」『大分文学紀行』など。

(二)

豊後、日向の境界をなす祖母山麓下、ここ土呂久に「山弥時代」<sup>注①</sup>という呼称が残されており、山弥自身の持ち山八開い山坑<sup>注②</sup>を存したという。口碑によれば、公床千軒・まつぼり床千軒と伝えて、往時の鉾山事業の隆盛の証とする。柳田國男の記すところの「日向の外録」であり、梅木秀徳編する「日向と豊後の国境近くの十六山」<sup>注③</sup>である。しかも「山弥長者」は、「朝日長者」や「炭焼長者」などと並び広く知られており、殊に祖母山麓の旧郷高千穂地方から南阿蘇にのびる一帯では、歴史的事実として語られる。それらは鉾物発見の場所を指し示したり、山弥屋敷跡を明示したり、鉾物運搬の要路

まで含めて、まことに具体性を有する内容である。山弥がどのような身分であれ、豊後府内藩に関わりをもつ八かなやま師Vであったことは否定できない。

そこで、高千穂地方に伝承される労働歌に「かねふき唄」がある。いま、山弥をよみこんだ二、三の歌詞を挙げると、

〆土呂久かなやま／誰が掘り初めた／府内三弥が／掘り初めた

〆府内三弥の／かね吹く音は／七里きこえて／五里ひびく

〆土呂久かなやま／山弥が庭にや／夏の夜でさえ／霜がふる

といったもので、七七七五の近世調のリズムをもつ「ふいご唄」であり、作業そのものと歌う呼吸とが一致する。今はひっそりと山懐に抱かれた鉱物の残滓地帯に化しているが、そこには「寺町」だの「仲町」だの往時の繁栄を伝える地名も残され、「惣見」であるとか「樋之口」であるとかの地名も鉱山に派生している。鉱山経営の機構の上から設置された「オイラン屋敷」跡や「酒屋」跡も確認できる。さて、その土呂久に伝わる「山弥時代」とは、いつのことであり、日向高千穂と豊後府内を結ぶ、いわば悲劇のシルバー・ロードは事実上存在したのであるうか。

注①宮崎県西臼杵郡高千穂町大字岩戸字土呂久。

注②拙稿「山弥時代の土呂久」(『鉱脈』第十一号)所収。

注③床とは、溶鉱所または溶鉱炉。まつぼり床は私床。「かねふき唄」に、

〆床屋千軒／みな吹きたつりや／空を舞う鳥／みな落てる」と。

注④『大分の伝説』(七)所収。

注⑤伝承では産物を金とするが、管見に入る限り銀。(『土路久銀

山覚書」等)

(三)

記録によれば、山弥について触れる記事のうち、府内万寿寺三世乾叟<sup>注①</sup>の「臨終発業の章」<sup>注②</sup>が最も古く、山弥処刑の一件を記載。本書は、いわば山弥在世時代の見聞録といったものであり、つづいて貞享五年(一六八八)刊の西鶴「国に移して風呂釜の大臣」のモデル化である。さらに、元禄七年(一六九四)成稿の貝原益軒『豊国紀行』にも記され「先年府内に、日根織部殿在城の時、彼町に古田三弥<sup>注③</sup>と云商あり。日向の銀山にて銀を多く取て大富人となり、府内に家宅を作る。」と述べ、以下刑死に触れる。

また、高千穂側で古い記録は、天保十五年(一八四四)成稿の高千穂田原正念寺一〇世寛隆の『高千穂日』で「土呂久村に金山あり。是は豊後府内の三弥といふもの友達の夢に、福来るべきを見し事を物語るを聞て、そのまゝその方角の通りを尋て掘たれば、夥敷金を掘たる事なり。」と記す。

そこで、土呂久銀山に関する直接の記録としては、管見に入る限り慶応四年(一八六八)の「土路久銀山覚書」<sup>注④</sup>と明治十七年(一八八四)の「宮崎県日向国臼杵郡岩戸村字土呂久銀鉱山ニ係ル取調書」<sup>注⑤</sup>の二部である。前者は肥後への銀山引渡しをとりきめた覚書を、岩戸村の庄屋が書写したもので、後者は熊本から鹿児島への譲り状である。ちなみに、土地の人々が後に八肥後やまV薩摩やまVと呼ぶ、その記録である。共に土呂久銀山を知るためには貴重

であるが、前者では山弥に触れるところがなく、後者も伝承として記載するにとどまる。いま、諸記録を参照し「山弥在世時代」を表化してみる。

西曆	年号	山弥 年齢	山弥 適否	日向 (高千穂)	豊後 (府内)
一五八四	天正十二	〇	〇	十月十六日、森田三弥処刑(伝) (高千穂町史)	山弥之助氏定生まれる
一五九三	文祿二	一〇	×	岩戸村土呂久山腹に鉾山(綾文書) 地誌)	元和初年より山弥豊後元祐の鑄銭
一六一六	元和二	二三	△	八月ヨリ山裏登尾ニ銀山(綾文書)	鑄造地―現大分市大手町―左衛門橋詰真木―豊後元祐考) 武泉
一六一九	元和五	三六	△	九月六日、三弥の刑死により木仏取替え(泉福寺)	日根野吉明府内城六代目として入封
一六二四	元和九	四〇	×	寛永ノ頃岩戸土民ヲ協力ヲ得テ銀塊ヲ得タリ(取調書)	八月、守田三弥助上野宝戒寺に灯籠寄進(現存)
一六三四	寛永十一	五一	〇		十二月、守田三弥之助氏定逆修塔建立(金池大智寺)
一六四〇	寛永十七	五六	〇		十月五日、日根野氏により山弥斬罪に処せらる
一六四七	正保四	六四	〇		

- 上の表中、諸資料に照合して該当する事項を○印、判定しがたいものを△印、明らかに誤伝である事項を×印として示した。それは、山弥の檀那寺であったと伝える岩戸泉福寺(前寺号・浄源寺)に、何故に誤伝の資料が残るか。同じく『高千穂町史』で、山弥十歳の処刑とするか。年代的差違や後に述べる法号等に差異を生じたのか。これは、どうも泉福寺の盛衰にかかっているものと推察される。最も注目すべきは、同寺五世義證の時代、享保二年(一七一七)三月に本堂・庫裡を炎上、古文書等のすべてを焼失、以降長期にわたり修復再興がすすめられ、本堂が完成したのは実に文化九年(一八一二)である。この間、無住職の六年間がある。おそらくこの火災によって、山弥の法号等をはじめ関係文書を失ったので、その間の空白が表記のような誤伝を生ぜしめたものであろう。
- 注① 十四歳で万寿寺へ。延宝八年入寂。享年五十九。
- 注② 随筆集『禅余集』所収。
- 注③ 誤記か聞き違いか。故意の記載か。
- 注④ 古記録を収集・書写「正念寺文庫」設立。嘉永七年入寂。享年八十五。
- 注⑤ 『高千穂特別記録文献資料』(第七巻) 所収。
- 注⑥ 宮崎県高千穂町高千穂役場岩戸支所蔵。
- 注⑦ 前同。
- 注⑧ 拙稿「山弥伝承研究ノート―土呂久を中心に―」『零点』第(四号) 所収。
- 注⑨ 同寺庫裡再建。享保二十年入寂。

(四)

ここでは、山弥の法号を含め事蹟等を日向側と豊後側に分けて記し、二、三の検討を加えない。

《日向高千穂傳》

(イ)法号 〓 広知院殿幻室宗勸大居士・文祿二稔癸巳十月十六日・府内

森田三弥寛靈・年六十三

(ロ)供養碑 〓 南無阿弥陀仏・豊後国森日三弥塔・文政五壬午三月 日

注①  
供養

(ハ)屋敷跡地 (伝) 〓 高千穂町大字岩戸字土呂久惣見寺町寺屋敷隣接

地

(ニ)右同 (伝) 〓 同字土呂久南

(ホ)山弥の持ち山 (伝) 〓 囲い山坑 (同地) 注③

(ヘ)山弥南蛮遺品 (伝) 〓 ギヤマン大器・椰子の実水筒等

《豊後府内側》

(イ)逆修塔 〓 幻室宗観大居士・寛永廿一曆十二月 日・六十一歳之逆

修・俗名守田三弥之助氏定 注④

(ロ)位牌 〓 広智院幻室宗観大居士・正保四丁亥十月五日

(ハ)過去帖 〓 幻室宗観居士・正保四年十月・守田三弥 注⑤

(ニ)回向帖 〓 幻室宗観居士・正保四年十月五日・俗名守田三弥 注⑥

(ホ)守田家過去帖 〓 相忠寺幻室宗観大居士・正保丁亥十月五日・守田

三弥之助 注⑦

(ヘ)同家系譜 〓 吉宣 一 伝左衛門氏寿 一 山弥助氏定 注⑧

(ロ)寄進燈籠 〓 寛永十七年庚辰年八月吉祥日・奉寄進石燈灯・守田山 弥助 注⑨

(ハ)屋敷跡 〓 旧万屋町一帯 注⑩

日向と豊後―土呂久を中心にと考えると、その間には標高千四、五百メートルの九州山地が横断している。地理的条件は極めて厳しいが、有数の鉱床地帯である。しかし、一旦稼行が断絶するとただちにさびれてしまう。山弥没後、交渉も途絶、例記したような違いが生じたものと思われる。用字・日付等は伝聞風・記憶再生風であり、中でも留目したいのは供養碑で、泉福寺の開基僧と並ぶ。姓の「守」が「森」とあるのは前記のような推量成りたつが、「田」が「日」とあるのは解し難い。本碑は風化摩滅しているわけではなく、おそらく山弥が罪人であった故に、意図的に一画落して刻字させたものではなかったろうか。それほどに、山弥は泉福寺にとって関わりの深い人物ではなかったか。他に泉福寺との関わりを伝えるものに、年代的に付合しないが、同寺を復活再興したのは、豊後の鉱山師森田三弥であるとか、土呂久銀山経営の三弥が同寺前身の浄源寺に、恵心僧都作の木仏を奉納したとかの記述がある。姓の「森田」は高千穂だけであり、豊後側ではすべて「守田」であり、「守田」が正しい。名は「三弥」または「山弥」を両用しているようである。これらの法号や事蹟等により、その罪状に謎を秘めてはいるが、山弥の在世時代を天正十二年(一五八四)から正保四年(一六四七)までの六十三年として間違いはあるまい。

ところで、西鶴は万屋三弥の住居について「京作りの普請、美を尽して、軒の瓦に金紋の三の字を付ならべ、四方に三階の宝蔵……」

と記し、真野の長者と対比している。『大分市史』には「守田氏、性は多々良にして大内氏の支系なり」と記し、家紋は「打板に十六菊」とも「釘抜紋」ともいう。『姓氏大辞典』には「金袋に十字」の紋とも。守田氏は大内氏、大友氏との関わりがあり、累代鉾山の開発に携っていたようである。<sup>注9</sup> そういう点で、あるいは家紋も関連があるうか。伝承では、多く貧しい商人の姿として登場する山弥、その実像は鉾山、鉾物等に専門の知識をもつ八かなやま師<sup>注10</sup>であったとみる方が当を得ている。

注①掛位牌・高千穂町岩戸泉福寺蔵。

注②同寺境内墓地・開基積浄尊の追善供養を兼ね、八世積大乘建立。

注③「囲い山」とは「自分山」に同じ。紫金原と道元越の中間地点。

注④大分市金池大智寺境内。

注⑤右同寺蔵。

注⑥三弥以外に同日付で、同族三名の信士法号を並記。同時に、死罪に処せられたものと思われる。右同寺蔵。

注⑦⑧行橋市守田家蔵。

注⑨大分市河野家庭園。

注⑩旧万屋町一帯。「山弥長者屋敷趾碑」(大分市藤野家)

注⑪銀・銅・亜鉛・錫・砒素等を産する接触交代鉾床地層。

注⑫「日州新聞」(昭・三・六・二十七日付)

注⑬『高千穂町史』所収。

注⑭宮久三千年氏の教示による。

(五)

土呂久の伝承では、すべての筋書きの中に「府内に帰る山弥は、千両箱を飛び石がわりに山越えした。」と語られ、大分の方では居宅の豪華さを「座敷の天井はビードロ(またはギャマン)張りで、金魚・銀魚を泳がせていた。」という。いずれも山弥の長者ぶりを語ったものである。『豊国紀行』では、其余財の銀三千貫目。其外器物の価千貫目。凡四千貫目皆城主日根野氏はを没収せらる。」と記す。この数値は、例えば技術専門職で最も取り分の多かった鉦吹大工の月当り収入が「銀六十文・米三斗」<sup>注11</sup>であることなどからすると、まことに莫大である。

そこで、山弥のような人物が登場する時代背景はどうだったのか。往時の金銀政策は、たとえば秀吉の統治下では、本来鉾山は公儀のものであり諸藩に預け置くとし、主要なる鉾山には直接奉行を配置、当該領主が運上を納めるといった管理形態。家康の代になると、主要鉾山は直轄とし、繁昌する鉾山についても上知させる方式をとる。従って、近世初頭の鉾山の試掘・開発等は幕府へ上申請可を得て、いわば採鉱税といったものを納めるという手続である。諸国でも藩の後見によって、特に金銀山の開発に執心している。<sup>注12</sup> また、鉾山の領有形態にも種々あって、地域によっては特殊な形態上の呼称を持っている。

寛永八年(一六二四)の大福銀山<sup>注13</sup>(のち見立錫山)の例をみると、山師の請負い方式で、これを「請山」という。山師が一定の条

件つきで鉾山開発を請負って、藩とは独立の採算制で経営稼行する方法。確かに「請山」においても、藩から派遣された鉾山役人が生産状況を監視するが、藩役人の扶持も山主が負担することになっている。一般農民でも開発に加わり、上納できるようにすると士分にとりたてるなどの例<sup>注④</sup>があり、土地農民も乗り出す。山弥の「囲い山坑」も、この類ではなかったか。仮に「運上山」であったにしても、山主であれば私的に蓄財することは必ずしも不可能ではない。「かねふき唄」に「神華城から／日隠みれば／ゴロの音する／めずらしや」などある。ゴロとは馬の鈴のことであり、土呂久には「出馬千匹、入馬千匹」の外国産馬の伝承もある。高地、間道は馬を利用して豊後路へ運搬したのであろう。恐らく現地では、銀鉛を抽出する荒吹きまでを行い、分離作業の精錬は府内であつたらうか。

以上、細部には触れなかったが、実在の山弥が登場する時代的素地は十分にあつたのではなからうか。山弥の刑死の事由がどのようなことであつたにせよ、渡り鉾夫・渡り山師の語りぐさでもあつたらうし、折からの流通経済の発展に伴い、港々を伝つていったに違いないと思われる。

注① 貞享二年・比平銅山（東白杵郡北方町日平）書出帳。

注② 小葉田淳『日本鉾山史の研究』等参照。

注③ 「延岡藩旧記」大福は土呂久隣接・西白杵郡日之影町大字見

立)

注④ 平部嶺南『日向地誌』所収。

(やまぐち やすあき・宮崎県史編さん室)

## 岩崎美術社

完全復刻

全21号

# 民族

民族学・民俗学・考古学・社会学・言語学・歴史学などの研究者を結集し各分野の粹をこえて初めて刊行された画期的な雑誌の完全復刻版へ内容目録

民族文化を多面的に照射し、その後の展望を示す

記念すべき論文や資料、報告を多数収録。

□体裁・造本／全21号・総四三六四頁を3号ごとに7分冊とした/A5判・上製本・布クロ  
 装・全7冊箱函入 □セット定価五二〇〇〇円・特価四八〇〇〇円(9月末まで)

□本誌は14年11月14日から昭和4年4月まで、隔月に刊行された雑誌であり、新刊は正雄、折口信夫、金田一、小寺融吉、今和次郎、川善之助、柳田国男、津田左右吉、東條操、島居龍藏、早川孝太郎、中揃いで入手することはきわめて困難。予約申込制であつたため、現在では全号

### 郷土趣味

完全復刻 全55号 民俗学、郷土史学の先駆となつた雑誌 定価三二〇〇〇円

〒113 文京区本駒込3-39-6  
 振替東京6-90649 ☎(824) 1731